



124



ふり口のなみこころをさへさへさへさへさへさへさへさへ
はまきとふつるぬらむしらの申さるもあつらふ
くしものさし判のさきせしつらつらめり物

一 妻もいふさぬ 藤のふらぬ 蓮の泳 舟を

おしころみろくさあろこしれきさくふ代も
ふかぬめしらきくのた 高津成章

きつつけのぬきれさうろあしりきせり
さうりしとさかなるきん 富田長喜

蓮翁の百廿忘のま向しよめる

祚お存むしらのあめをさのあもむ 社
しられれうきうつ 中山古賢

序
題菊冰帖

一滴露華凝不流
曉來只看玉冰浮
永年百五萸翁句
今日冷白菊
城山曷

全前

东麓一自吐清香嫩
葉孫枝倍盛昌百五
十年凝不解冰姿今
尚故餘光

高律清



全前

清籟冰玉散空光
涓滴不融映夕陽
更清
香耐悠人濃薰
一百
五十霜
一任



榮能氷之上

范蠡趙辛のころをよめる山家集の

題し傲ふ

一系も老をぬき雪のふり那

服起誹諧

存の山房乃一も色すつて
ほくしと花をふりて冬の来く
近祥
白兔

茶のうのうは新猷乃先

雲裳

仕り城へ志しく白を入るお哉

箕山

るくくと雪の雫をきりあ

龍夫

重きうををまきまきし立思

赤山

梅と草の片手ぬきく秋

静山

かきしと懐の駒鳥の夢ふま

少郷

初きこのまきまきしきりり

花蒼

あきくわ色南候しふ自由

卜咲

葉内なりしを以るうかひ

松雨

股肘よなきた涙面の障世

菓芦

かつきしやるぬ紅糸秋

白彦

杉立のまきまきしきりり

久也

久しきや秋のあきひ

一陽

子産を角力のふき乃初き

月泉

蒜乳まきいもまきしあ

佐助

生美乃を信山りおら多

壽杯

見遠くふとそり糸の子 二泉

うらけとをねと茶とついで年 月國

さくら離るゆい乃雲 尤右太

各一順

姨捨のぬい星のふくまひとほくろひ

まてに阿のさく杖をさうてい月

サウらう言井の歌六川のまきよ

祖翁の遠志をいさむい付るまの

一かみのけりけり人々やまに病居

此縁おをわらう百五十秋のサウ

まきよ

伊豆中々さうさうすゑれ 近祥

餘稿

秋きつやおきく落る木の雲 白彦

月をかたれとつのもきりい 雲裳

浦らちの付く新酒と冷出し

近祥

融乃祝く秋のちいさき

彦

こつそりく降く初雪さきぬ

裳

袴穿きし 秋 雑 水

祥

幕目のこまのしほれ さきぬ

彦

節々人をとく 小調市

裳

伯母我きくそくぬ舞のせき勤め

祥

わらけへ世へ行を啼く

彦

鱈若くさいと産のよきついで

裳

鶉さかけえきそくついで

祥

毛見のあと存見をきく

彦

懐医者のよいき 轉なり

裳

質店の灸やきく せんき

祥

はくのこく 美菜茎きつ

彦

雪あしもきく 花の咲きく

裳

卯の風箏のせき 破す

祥

卯の風箏のせき 破す

祥

ナ
ういりつて穀の産りーあやう産

彦

河津ふくもろちふ 生産林

裳

膝より或やうてし底をぬりしに

祥

二艘なるんこ務のこりて焚

彦

不列しと被の被をふりてふ

裳

ちりて或やうてし底をぬりしに

祥

並並以尾を半の運ハき敷

彦

長嶽して湯をきりしり索

裳

軍場も大う町りなりうり

祥

関々名のこりけりぬ 月

彦

勢いふぬむりて先へ追をか

裳

和葉の連々 華へなとちり

祥

宋飲くもハ急て用の足る

彦

ちりて供りてきりらくれ奉 公

裳

そりて中京の名不務強ちふ

祥

花よりつめり山のやうり雲

彦

再くの春よ木の芽も出合はま

裳

扇乃先よ露のくも

裳

朽くまゝに深くまゝにみら

和春

まゝに秋のまゝに水おと

雲裳

果乃お清まゝに秋夕月

近祥

甚ば春の初工場に

春

ひまの葉をくむらのみ

裳

まゝにふさぎ床の輝き

祥

揚子路もなほ糸を菜き

春

尾のいとまゝのいひ

裳

掌の雪の葉乃修きたる

祥

まけやまのいひ

春

海株のめぐるやうし

裳

朝鮮とよあまのま

祥

伊勢

唐く唐く 鏡の存く 春

多水かいつ 椽の 裳

神の 世は 祥

人 葱く 春

明る 花あり 裳

暁 暁 土 祥

横 珍や 只遊

松 契 秋を 雲裳

出 杜氏を 和春

曆 を 下る 椽 先 推歌

母 不 榭を 鳥霞

露 の 糸 近祥

さ ぬき の 巾を 裳

灸 の い ぼいを 歌

七

七

立物うゝ 糸ひのさきりふてや
えりあまの山のたけすしよ

孔左

葦

媛山生雨

そとすくなくさきよつ雨の月
瓢のさけりしつる 船の香
漸きくはるある家りやうり
形識 若くやう 掃除 手傳ふ

近祥

都袞

柳秋

雲裳

色をるの中 花のさきむえ

孔左

片端町まきしほ 山吹

蕨石

きれ石の本の写り 山吹の月見

碩布

入あつてきれさきく月見

水竹

山吹の山吹をさき月見

言二

紫杉のあまの山吹の月見

峯水

信

式

あきいそはるしとあり月よみ

竹林

あきいそはるしとあり月よみ

素遊

あきいそはるしとあり月よみ

南喬

あきいそはるしとあり月よみ

桂好

あきいそはるしとあり月よみ

白英

あきいそはるしとあり月よみ

亀齋

あきいそはるしとあり月よみ

翠兮

あきいそはるしとあり月よみ

尚故

信 武

あきいそはるしとあり月よみ

二葉

あきいそはるしとあり月よみ

一虎

あきいそはるしとあり月よみ

可翠

あきいそはるしとあり月よみ

携歌

あきいそはるしとあり月よみ

知見

あきいそはるしとあり月よみ

桂秋

あきいそはるしとあり月よみ

彌天

あきいそはるしとあり月よみ

柳玖

國兩すすておらゆる和踊解

鵬嘯

すけくすく不む各角力の長多心

一叟

見ちのりの括ふゆや合もさむ

芳蘭

角紙をそとけもとの玉のりけり

赤亭

柔まらりい香みこけ六世唐りか

聖石

今きて一まらりも玉や香の玉

阿壳

との山しんく峰じ扱めあ

雲鳳

屋中や香めなをりもりし

亀杯

哉むりりぬつと香しとを

一陽

ととみおくはふまをりや香の中

閑吐

卯塔のやを故返や鉄彼岸が

山雷

鳥のいんりこそあまきさるか

孔龙

月入くうもくらぬきぬく香

松露

秋冷や肩のひやほくさここは長

咲草

秋の面障けさるそ相喜あ

喜龙

新香やのらハ月和とありハ海し

千久裳

芳外の暮りしきしる秋多し

相一葉多しとまじり海しり

底し二葉とけのまじり此も可那

まじりてゆるまやまの花

新緑の笑ほまじり阿らし側

志のりしある中しとまじり

思定くある際しあり心杯の春

大のまじりぬまじりまじり橋の花

西馬

一我

倭文雄

赤山

芦月

箕山

少守

伯弓

稻の穂しころるまめ此きん

折流の流るくまめすまめ

折し中し屋をまめまめまめ

集りまめまめまめまめまめ

植先す乾くまめすまめ

花のまめまめまめまめまめ

植まめまめまめまめまめ

らんまめまめまめまめまめ

湖石

月泉

月國

二龍

嵐山

扇奈

楠石

蘭石

吹りたる花をくまきり

武 秀鹿

雨あそびの鬼灯きり

信 和春

土をりりるに菜こ

湖 曉

蓼の花をきりて

奥 大我

渡りゆく水に

信 由人

草のたぐひを

洗耳

寺のまはりに

蝸牛

あそびの

宇明

霞のまはりに

霞外

山のまはりに

霞外

花のまはりに

只遊

たのみの

鶴聲

花のまはりに

南中

晴れゆく

武 青湖

宮中の

信 蘭庭

まをり

梅笑

おむすそくきくあり杖の山

左右太

月夜老人の夢跡を来して

ま礼する存り信世の夢も好

雲鳳

喬大切りす鉄字の戸

何丸

こま十をそりみなりを
かゝるはあしとあそふそ風

いしをそりみなりを
かゝるはあしとあそふそ風

難波はや田原の姉も冬こぬ

昭起謙語

柔くも巻け笠のふくぬい

近祥

刈りて来束のまきもあつ

恭齋

市の出らと待ちをり程

融く

永き日を操りぬさぬ結の尻

蘭糸

視のうらく筆のあつら

柏子

うらきりと晴くのれ雨の跡

繁光

まのけらるるすゝの灯火 碧水

まのけらるるすゝの事 一貫

茶のまのけらるる酒の持に 文好

あまのけらるる秋のおりけり 静雲

月のまのけらるる西山のとう 桂蔭

猪札をまのけらるる多心まの 器水

肩犯ぬいゝ程ゝゝ毎夜やゝ 島齋

博方のまのけらるる唾ゝゝのまの 周月

まのけらるるまのけらるる乃 細 溪水

まのけらるるまのけらるる乃 雲裳

時をまのけらるる乃 南谿

まのけらるる念仏のまのけらるる 吼石

人の羽をり乃 禮おゝやゝ 瓜僊

右一順

尋ね採集のまのけらるる乃

先をさるるころのわらわら

都久裳

白くしきけをく山菜菜の女

近祥

押のころの客を上送り

雲裳

不気味ききき 認めく

都裳

丸く糸をくけのふきき

近祥

とりし 竹万の海

雲裳

祠の葉へ拾った庭のき

都裳

肩端のき 嫁らう

近祥

石の代糸まわく

都裳

いさく 汲くも多ぬ

雲裳

秋をくしき 柱お戸

都裳

ちりくく かける 朽骨の綿

近祥

薬喰家内 扱の扱なり

白兔

出くすれき 雲のをれ

雲裳

根う契一の杉一車路ハ寒もく

近祥

うら大工の羽織若くみ新

兔

やうくさるる存之のいそひ

裳

ふれ競ひしきく啼やむ

祥

ぬきせけ垣の糸瓜のあきふみ

兔

くまひのちらぬまはふもき

裳

くまひの中らぬまはふもき

祥

粽のあしぬはく大巻

兔

不二景くくくくくくく

裳

助々る士の武家をかしの

祥

あまの正懐をきくこの

兔

机きき懐 ぬふ 茶の香

裳

羽やうて給甘しも子のく

祥

廣道との所する身代

兔

海無きく心の茶をくやめて

裳

木下石のくくくくく

祥

彼岸うけふらば 畑の庵ふしと
 油の香 空拵さす娘く
 小振舞家々 半分手借ふ翁
 帳束のとりと とうきりる
 半月のなりよ 引くる 溜の痕
 四つあふ 舞も まゆ二羽つ
 靨者の 智カて 巻く 昂りうち
 らかえの されぬ 市のうれ方
 持るふ 連らば なりよ 抱ひ先
 大それた 少きを うらさけなく
 清しと 存る 袖の下 冷く
 起るきき ありも 色
 懐くも 懐の 離れ 走んうんと
 命 けい いせの 葬 礼
 宿列の ち 海 けい 岸を 守
 卯上 豆 乳 妙を 守り みる

兔 裳 祥 裳 兔 裳 祥 裳 兔 裳 祥 裳 兔 裳 祥 裳 兔 裳 祥 裳

上
十一

不りしと存程
てしき花ありあ

裳

節々
あし
さつ
塚

祥

鏡山さうり
なす
堂

七十七
尚故

さうり
なす
梅
何丸

あ
の
代
の
昔
田
の
契
し
あ

款
と
次
の
遊
水
唐
れ
一
真
な
る

ま
さ
契
い
さ
ら
な
ふ
人
の
契
り
あ
る
契
と

あ
の
尚
故
い
さ
ら
な
ふ
人
の
契
り
あ
る
契
と

今
の
契
り
を
ま
さ
契
り
と
し
て
天
保

卯
の
な
ら
ぶ
契
り
と
し
て
天
保

何
れ
の
な
ら
ぶ
契
り
と
し
て
天
保

あ
の
契
り
と
し
て
天
保

尚故弟

性
者
れ
さ
ら
な
ふ
人
の
契
り
あ
る
契
と
楚泉

か
く
し
い
出
る
契
り
と
し
て
天
保
湖
水
老
人
の
契
と

上

十一

年のまわしをぬしよきまのな

うらまひをいふ

蝶々 扇さけのなまじく 雲裳

とらふしやうくして終に 相引

仙とやけりぬ

送り荷の北乃ちひ 暮の月 近祥

うつれぬの 入る 秋 先 蘭児

秋のま乃やまむるも 未結 結 女

お次をくぬいの 暮に 候て 未て 女

異まきり 産の 石を ばくうふ 其峰

そよりともをぬり ぬを せり 掛ひ 児

江戸の 飛脚の もゆる 月あ 裳

なるは ちかき 小き けうつ 祥

徳の 舞 ちる さう 乃 泉

そよらる 糸の 社を かき 合を 裳

そよらる 糸の 社を かき 合を 裳

怪も好く真く何れも止まら
ず梅も介も遠ある接うら
布もまじりて終いいそり

峰 祥 裳

もつ雪や春の下りる白の中
を流す水を掃くまじりて暮れ
らるねえぬまじりて雪の家
まじりのまじり雪の位出す子作は

信 武 信
癡仙 瓢水 一米 芳山

雪の結ぶれくまじりてあり
心つとたぐく不る梅や秋の雪
多一羽もくは秋のけいものま
はくまじりて雪の縁りか
親舟の破おろまじりて雪のま
まじりてれまじりて合やまじりて
初一かまじりて羽うまじりて
まじりてらまじりてつりまじりて初雨

信
其峰 柏子 若人 金翠 一葉 如松 田守

又遠く山や...のま...られ

美丁

降...ら...る...き...い...ま...ら

碓嶺

花のま...く...の...ま...り...く...み...あ...れ

林圃

一...く...ま...麻...子...の...ま...る...の...ま...る

一詠

今...り...り...く...西...り...る...帯...う...り

獲齋

半...り...家...り...あ...る...ま...あ...る...ま...あ...る

林花

若...り...の...ま...る...や...ま...る...ま...る...あ...る...ま...る

竹雅

一...り...く...ま...る...や...あ...る...ま...る...あ...る...ま...る

仙光

月...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り

花雪

あ...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り

露翠

う...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り

咸六

大...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り

肆兆

畑...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り

卓郎

麦...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り

文好

中...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り

蒼朗

初...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り...り

梅塢

猶先一 春をよ本の葉に吹あらし
白齋

止ぬもまゝ、こゝろしめあつゝかし
沙鷗

こゝろしやちよとまゝぬ赤の行
南

あゝしや橋もまゝめり新の鳥
鶴村

あふゝのちりゝはせゝ 雨の花
鬼吉

葉のたや 神をけりし新をい
寄三

あゝあゝははゝまきあやま仙茶
天来

あゝあゝやーちよあゝ屋花を
梅堂

松あふふまゝゝゝゝゝゝゝのい
映雅

うゝゝゝ 時や冷さゝふ松のさ
齊春

冬川やあゝゝゝゝゝゝゝゝのい
柳卜

川おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
加石

鈴鈴のさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
所花

あゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
接可

あゝあゝやあゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
鳥霞

あゝあゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
静一

椿嶺更

口すめをききとてあやむるも

梅塵

落葉をふむあひる程ぬめり

歸徳

うさぎのやうにいらそ暖鳥

亀杖

霖の例いまをかく男可れ

上毛 蔭雄

波の上の舟をまわすよ生海嵐かな

信 成布女

板の写りこまぬをきくさうか

亀三

同じるもあやうきさうか

一之

つげものゑおしとるさうか

里桂

わと川の氷をきくさうか

孟夏

沖よりきくさうか舟の出程かな

蘭児

あやうきさうか

一朗

足併はゆきさうか

嵐外

あやうきさうか

信 楚雪

炭焼く海山さうか

池月

圓きさうか

真吉

炭の香やあやうきさうか

五渡

所書以や 物鼻用乃ちうひうら

信

壽杯

まゝをいひて 初屋とていひまきハミカ存

五郁

よくまれとららの人たをまき 拂

武

融々

阿さめく 捨く 志まふ 海をうし

再青

いふまゝもあまれ 買ふや 香の市

而后

あやも 唾の 中をまきとてのうれ

信

白彦

あはれ 音をやり 妻とあ 大崎 日

楚泉

